

様式2

令和5年度 自己評価表（中間評価）

鳥取県立米子工業高等学校

校訓	自律創造協働	中長期目標 (学校ビジョン)	ものづくりができる人づくり ものづくりを通しての人づくり	米工ミッション	地域社会・産業界に貢献する人財育成	今年度の 重点目標	1 ものづくり人財としての自律した態度と技術の育成 2 ふるさとキャリア教育による在り方と生きがいの創造 3 持続可能な地域社会への協働参画 4 地域ネットワークとの連携 5 向上心とワークライフバランスの実践
				目指す生徒像	自主自律の精神を持ち、他者を思いやる 創造力豊かな工業人		

評価項目	評価の具体項目	年度当初				評価結果		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	評価基準	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 ものづくり人財としての自律した態度と技術の育成	(1)実践的な技術・技能の向上	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍においても参加可能なコンテスト・大会に参加している。 令和4年度ジュニアマイスター取得者実人数は28名。 	<ul style="list-style-type: none"> 資格検定に意欲的に取り組んでいる。 ものづくりに対する興味関心が高まり、自ら技術向上に励んでいる。 高校生ものづくりコンテストなどに積極的に参加し、上位へ入賞する。 卒業生の3割(50名)以上が、ジュニアマイスターを取得している。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒「自分は実習を通じて、技術・技能が身についた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 卒業生の3割以上の生徒がジュニアマイスターを取得すればA。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習などをとおしてものづくりの楽しさを体験させ、より高い技術習得を意識させる。 専門の授業において、ものづくりの楽しさと意義を生徒に伝え、生徒がコンテストにチャレンジする意欲を高める。 部活動とのバランスに配慮して取組ができるよう検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒は資格取得に向けて意欲的に取り組んでいる。 第二種電気工事士は電気科、環境エネルギー科合わせて20人が受験し12名合格した。 第三種電気主任技術者は6人受験し、科目合格者1名、合格者1名であった。 ものづくりコンテストにおいては、旋盤部門・化学分析部門が中国大会に出場。測量部門では、初の全国大会に出場。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 補習及び技術習得、技術向上のための指導を継続的に行う。 ものづくりコンテストに出場できていない部門は、積極的かつ継続的に生徒への声かけを行い参加を促す。
	(2)安全教育による5Sの実践	<ul style="list-style-type: none"> 実習時に5Sと安全教育を連動させて指導している。 	<ul style="list-style-type: none"> 5Sの意味を理解し、取り組み内容が説明できると共に安全を意識した行動ができる。 5Sや安全への意識を日常生活に活かしている。 自転車用ヘルメットの重要性を認識し、自転車を使用する時に着用している。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒「5Sの習慣が身についた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 ヘルメット着用率が80%以上ならばA。 教職員「安全教育について概ね徹底できた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 	<ul style="list-style-type: none"> 各授業・実習の中で具体的な5Sの目的と取り組みを明示し、実践することで身につけさせる。 5Sの考え方を日常生活や部活動などに転用できるよう考えさせ、安全教育を定着させる。 整理整頓を促す啓発ポスターを掲示し、5Sの意識付けを行う。 保護者、関係機関と協力しながらヘルメットの重要性について周知・指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 整理整頓を促すポスターを掲示し、各場面で5Sの意識付けを行った。 授業や実習等の各場面において5Sの徹底を指導しており、全体的に定着してきている。 実習を中心に各場面において、安全指導をしている。 ヘルメット着用率が減少傾向にあり、約45%である。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の日常生活の中に5Sの取り組みが浸透するようSHRや授業・実習、部活動における指導も継続的に行う。 日常生活の安全を生徒が意識するように、学校生活、部活動等においても指導を継続的に行なう。 ヘルメットの着用を引き続き呼びかける。
	(3)自己研鑽による学力の向上とICT活用	<ul style="list-style-type: none"> SPI小テスト・基礎力診断適性検査等を実施し、必要とされる基礎学力のレベルを認識させている。 教職員はICTを活用した授業展開の方法や今後の教育のあり方などについて研修している。 	<ul style="list-style-type: none"> SPI小テスト・基礎力診断適性検査等を活用し、社会人として求められる基礎学力のレベルを認識し、就職試験等に対応できる力をつけている。 生徒はICTを活用しながらお互いに協力し合い、主体的に学んでいる。 教職員が授業や生徒指導にICTを活用している。 	<ul style="list-style-type: none"> SPI小テスト及び授業に関するアンケートで生徒の肯定的な回答が80%以上ならばA。 SPI小テストが結果が向上した生徒が全体の80%以上ならばA。 生徒、教職員のICTの活用が80%以上ならばA。 	<ul style="list-style-type: none"> SPI小テストの実施意義について、年度当初に文書を配布し生徒に説明する。 SPI小テスト実施後に解答を示し、不十分な理解を補うと共に低得点者に対して学び方を指導する。 オンラインコンテンツの活用、他校の視察や校内の授業公開などで研鑽を積み、生徒の意欲を引き出す授業を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> SPI小テストは年度当初に文書を配布し、意義について生徒へ周知した。 SPI小テストの低得点者に対して、夏休み前に補習授業や課題提出を行った。 ChromebookなどICTを活用し、SPI小テスト・アンケートなど実施した。 座学及び実習を含めICTを活用し、生徒の意欲を引き出す授業を展開している。 Findアクティブラーナーを活用している教職員が限定的である。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 学び直しのフィードバック等を行う。 SPI小テストでは、2学期末も低得点者に対する補習を行う。 指導力向上・研修の1つとして、Findアクティブラーナーなどのオンラインコンテンツの活用を促す。 ICTを活用した授業づくりに向けた校内研修を企画する。
	(4)バランスのとれた計画と行動力の育成	<ul style="list-style-type: none"> 遅刻をする生徒が一部に見られる。 レポート、課題など期限内に提出できない生徒が一部見られる。 資格検定の補習や各種大会に参加している。 	<ul style="list-style-type: none"> 規則正しい生活を送り、学校に遅刻することなく元気に学校生活を送っている。 レポート・課題が期限内に提出できるように、計画的に行動している。 資格取得の学習と部活動を計画的に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 2学期までの遅刻合計1回以下の生徒が80%以上ならばA。 レポート・課題の期限内の提出が全体の80%以上ならばA。 生徒「計画的に行動することに関する」集約結果が全体の80%以上ならばA。 	<ul style="list-style-type: none"> 届けなく遅刻、早退、欠席した生徒の保護者へ連絡を取り、家庭での基本的生活習慣の改善について協力をお願いする。また、生徒が抱える現状を職員が丁寧に聞き取り改善のための適切なアドバイスを行う。 提出物が遅れる生徒に対して、計画的に取り組むように声掛けをおこない、支援する。 大学進学希望者、公務員受験希望者への計画的な指導を実施する。 資格取得を推進し、それぞれの生徒に必要な資格・検定の選択と受験までの計画の立案を支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> 特定の生徒が遅刻を繰り返しているが、保護者と連携・協力しながら改善に努めている。 連絡なしの遅刻・欠席が頻発する事情を抱えた生徒(家庭)への対応について、関係機関と連携しながらチーム支援の対応を図っている。 提出物が遅れる生徒に対して、提出に向けて支援・指導を実施している。 資格取得については、学習支援員を活用するなど計画的に補習を行う等の支援を実施している。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 保護者との連絡をより密にし、特定の遅刻者に対して継続的な指導をする。 支援の必要な生徒に対しては、引き続き関係機関等と連携しながらチーム支援で対応し、基本的生活習慣の改善を図る。 提出物については、継続的に支援・指導を行う。
	(5)特別活動と部活動によるコミュニケーション力の育成	<ul style="list-style-type: none"> 部活動への加入率は高く活発に活動している。 コロナ禍においても生徒会を中心に実施可能な生徒会行事等を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 多くの生徒が部活動、生徒会活動やボランティア活動に参加し、満足した活動を行っている。 部活動や生徒会活動をおとして、競技力のみならず、人間関係やチャレンジ精神をより高めている。 生徒会執行部が主体となった生徒会行事が行われている。 学校生活及びSNS上のコミュニケーションが向上している。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会活動に関するアンケート項目に対する肯定的な回答が全体の80%以上ならばA。 部活動への加入率が80%以上であり、さらに活動をおとしての満足度が80%以上ならばA。 生徒会執行部の70%以上が主体的に活動できたと認識していたらA。 	<ul style="list-style-type: none"> 年度途中で退部した生徒にも、本人の意向を尊重しながら、他の部活への入部を呼びかける。 部活動での大会成果や活動をHPや校内掲示板へ掲載し、活動の魅力を伝えることで部活動への加入を呼びかける。 定期的に生徒会執行部から情報発信をおこない、生徒会行事への参加意識を高める。 生徒会活動や授業などをとおして、コミュニケーションを円滑に図れるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校での活動に意欲的に参加できるよう、生徒会執行部への加入を生徒に呼びかけている。 生徒会活動をおとして、行事の運営や生徒への呼びかけ等をおとして、コミュニケーション力の向上を図ることができた。 各行事において、米工MAKERSなどを通して効果的な発信をすることができた。 ものづくりでは、日々技術などを磨き全国大会はじめ上位大会へ出場することができた。 「はるかのみまわり絆プロジェクト」はPTAの協力のもと人権教育部および生徒会が連携し各作業が円滑に行われている。役員だけでなく有志生徒も参加している。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が自主的に行動できるように、生徒会執行部を中心に部活動及び生徒会執行部へ加入の声かけを引き続き行う。 「はるかのみまわり絆プロジェクト」については、室長(人権委員)と執行部員以外の生徒の参加をさらに促し、多くの生徒の活躍の場として活用する。

年 度 当 初						評 価 結 果		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	評価基準	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
2 ふるさと キャリア教育 による在り方 と生きがいの 創造	(1)倫理観のある 人づくりの実践	・生徒の挨拶は概ねできているが、自ら挨拶できない生徒が見られる。 ・思いやりに欠けた言動によるトラブルがみられる。	・自ら挨拶ができ、場面に応じた言葉遣いができるなど、マナーがさらに向上している。 ・周囲の人への配慮した行動ができる。	・教職員「生徒の挨拶は良い」「生徒の言葉遣いは良い」等アンケートの集約結果が全体の80%以上ならばA。 ・対人関係のトラブルの減少	・登校時、授業開始時など様々な機会を捉えて挨拶の習慣化を図る。 ・地域との交流や実習などの協働をとって、他者理解を図る。	・自発的に挨拶する生徒が増えている。挨拶のできていない生徒には教員側から積極的に挨拶をしている。 ・授業開始時および終了時の挨拶を通し挨拶の習慣化を図っている。 ・授業中の発言に対して周囲の人への配慮がなされているが注視している。 ・生徒どうしの相互の会話などで、いじりやからかい、人権侵害などにつながる発言や行動によるトラブルがあった。	C	・挨拶については、継続的に指導を行う。 ・人権学習LHRの時に限らず、日常でも差別や人権侵害を許さないように人権啓発の情報提供などをする。
	(2)生涯を見据えた 生き方の構築	・就職希望者については100%の就職率を達成している。 ・進学希望者については国公立大学へ1名合格した。 ・コロナ禍においても受け入れ企業が確保できたため、全科でインターンシップを実施した。 ・コロナ禍においても、地元企業見学・県外企業見学を実施。	・進路実現に向けた主体的な取組を行い、生徒が満足できる(納得できる)進路決定を行う。 ・多くの生徒が第1希望の進路先に内定または合格する。 ・実際の現場を見学することにより専門科目に対する興味関心が高まり、意欲的に日々の学習に取り組んでいる。 ・企業現場での実習を通して専門的な知識や技術・技能に触れることで、進路に対する意識が高まっている。 ・大手企業見学をすることにより多様な職業観が育ち、所属学科や専門科目に対する興味が高まっている。	・進路指導及びインターンシップ・企業見学に関するアンケートで生徒の肯定的な回答が全体の80%以上ならばA。 ・生徒の第1希望の進路先への内定または合格が90%以上ならばA。	・生徒が主体的に進路選択を行えるよう、キャリアパスポートを活用する。 ・進路状況や進路に必要な知識・技能に係わる情報を、LHRや進路講演会などを通じて適宜提供する。 ・求人票や指定校一覧を生徒各自のICT機器で閲覧できるようにし、家庭で進路決定の資料として活用できるようにする。 ・面接指導、個別指導を実施し、効果的組織的な進路指導を行う。 ・企業を見学することにより、産業全般に対する認識を深めさせ、将来の進路選択に明確な目標を立てさせるとともに、所属学科や専門科目に対する興味関心を喚起する。 ・インターンシップでの知識や技術・技能を学ばせることにより、日々の学習への意欲や積極性を喚起する。 ・資格取得に向け、放課後・長期休業中に補習を行う。	・キャリアパスポートを改訂(グループディスカッションを追加)し、進路LHRで活用した。 ・学年全体の進路LHRや保護者対象説明会を実施し、タイムリーに情報提供した。 ・求人票や指定校一覧をGoogle共有ドライブに掲載し、生徒個人の端末から閲覧できるようにした。 ・面接指導を全教員で取り組んだ。 ・インターンシップについては、受け入れ先企業と連携し、10月下旬の実施に向けて準備を進めている。また、地域コーディネーターの方に企業との連絡調整を行って頂いた。 ・県外企業研修旅行を9月上旬に実施。生徒アンケートにおいては、満足度が高かった。 ・県内企業見学は、建設科が9月上旬に実施。他の科も今後実施する予定である。	B	・就職一次応募で不合格の生徒に対し、時を空けない指導を行う。 ・進学希望者に対し、担任と連携して志望理由書等の指導を行うことに加えて面接指導を組織的に行う。 ・充実したインターンシップとなるよう企業と連携し、生徒への指導を継続する。
3 持続可能な 地域社会への 協働参画	(1)ユーザー視点 による地域課題への 貢献	・地域貢献活動を各科が積極的に行っている。 ・課題研究で身近な課題に関するテーマ設定を設定した。	・地域の課題を解決する取組や身近な人の困りごとを解決する支援活動により、ものづくりの意義を学び、自己有用感が高まっている。 ・課題研究発表などで視聴者が分かりやすく工夫している。	・ものづくりをとおして地域社会に貢献するアンケート項目に対する肯定的な回答が全体の80%以上ならばA。	・地域や身近な人の課題に目を向けさせ、自分たちの学びで関わられることを考えさせる。 ・課題研究を支援することで、生徒が地域課題へ積極的に取り組む。 ・生徒が地域課題を発見し、テーマや研究内容の設定を生徒主体で取組むように指導方法を工夫する。 ・課題研究の計画、中間報告、最終報告をHPに掲載し、取組を公開する。	・課題研究において、生徒が地域の方などと接することにより新たな課題の発見とその解決に向けて模索することができた。 ・今年度もマチナカクリスタルのイベントへ参加予定である。 ・機械科、建設科では近隣自治体などからの依頼を受けゴミストッカー、木製ベンチの作製したり、白線引きを行った。	B	・引き続き地域の方と関わり、地域の課題など解決に向けて取り組んでいく。
	(2)防災・減災への 専門力の活用	・啓成小学校との合同避難訓練を年1回実施。 ・雪かきボランティア活動を行っている。 ・災害時をテーマに課題研究で取り組んでいる。	・合同避難訓練などとおして、防災への意識の向上を図り、将来災害時に行動できる。 ・課題研究で専門性を活かし、災害・減災について取り組んでいる。	・生徒「課題研究等の取り組みを通して、防災に関する」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・合同避難訓練・授業などを通じて、生徒が防災について専門性をどのように活かすかを考えられるようにする。 ・生徒会を中心に「雪かきボランティア」への声掛けを行う。 ・課題研究で安心安全な社会を実現できるように教員が支援する。	・「はるかこのひまわり10周年記念」イベントに参加して、生徒にとって安心安全な社会の実現に向けて行動することを考える機会になった。 ・イベントに参加することで、生徒が積極的に行動する面が見られた。	B	・今後も地域の方と関わるイベント等があれば、積極的に参加していく。 ・防災・減災において、地域の状況に即した取り組みを行っていく。
4 地域ネット ワークとの連 携	(1)地域と連携した 教育活動	・コロナ禍のため小学生に対し出前授業、中学生体験学習は中止。中学校への出前授業は1校実施した。 ・社会人講師による技術指導を実施している。	・出前授業等で様々な異校種連携をとおして、小中学生がものづくり教育への関心を高める。 ・地域の人材を活用して専門的技術を習得し、資格を取得している。	・生徒、教職員「地域貢献」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・地域や身近な人に具体的な製作物やシステムを提供する生徒の活動にアドバイスと支援を行う。 ・中学生体験学習や学校説明会で、ものづくり教育の意義を理解し、関心を高めてもらえるよう内容をブラッシュアップする。 ・資格取得に向け、地域の人材を活用したサポートを行う。 ・ICTを活用した新たな交流方法も検討する。	・中学生体験学習においては、中学生にものづくりの楽しさを伝えることができた。 ・学校祭において、各産業界の方に業界に関する展示をしていただいた。 ・学習支援員による測量士補、2級土木施工管理技士補の資格取得支援を行っている。	B	・小中学校への出前授業にも今後取り組む。
	(2)米工教育活動 の発信	・学校から情報発信を行い、学校理解を進めている。 ・米工MAKERSを週2回発行している。	・ホームページ、マチコミメール、マスメディア等を通じ、学校情報の発信をタイムリーに行う。 ・米工MAKERSでは学校の取組に加え、生徒の何気ない成長を取り上げた内容となっている。	・教職員「中学生体験学習・学校公開等を通して、中学校や保護者へ本校の内容を概ね伝えることができた。」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 ・保護者「家庭への連絡がきめ細かく行われた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・見やすいHPのデザインを検討し、変更する。 ・ホームページの内容(学校行事・部活動報告など)を定期的に更新するなど、積極的な情報発信に努める。 ・マチコミメールを活用し、保護者へ情報を迅速に伝える。 ・報道機関への資料提供を行う。	・ホームページや米工MAKERS(火・金発行)を活用し、各科・分掌の取り組みや学校行事など情報発信に努めている。 ・マチコミメールを活用し、保護者への情報提供を行っている。 ・各科・各部活動の情報発信が散発的になっている。	B	・引き続き迅速な情報発信に努める。 ・各科・各部活動の情報発信が積極的に行えるよう、HPへの掲載方法に関する研修会を行う。 ・HPのデザインに関して検討していく。

年 度 当 初						評 価 結 果		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	評価基準	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
5 向上心とワークライフバランスの実践	(1)自己研鑽	・オンラインコンテンツを利用するなど自らを高める取組を実施している。	・自己研鑽に励み、生徒の成長を支援する力量を高めている。	・研修会に参加するなど具体的な取組を実施した。	・自ら高めたい目標を設定している。 ・研修案内を意識し、積極的に参加する。 ・今後必要となる専門的な知識・技術の習得のため教育書籍やオンラインコンテンツを活用する。	・職員室掲示板等を活用し、研修案内を提示している。 ・オンラインコンテンツを活用し、効果的に授業を展開している教職員が増えている。 ・研修の参加、Findアクティブラーナーを活用している教職員が限定的など、一部の教員が、自己研鑽に努めている。	C	・引き続き研修案内を提示し、積極的な参加を促す声かけなどを行う。 ・自己研鑽の時間が確保できるよう定時退勤を促すなど、業務改善を検討する。 ・自己研鑽した知識や技術を授業等で還元していく。
	(2)ワークライフバランスの取組	・多くの教職員の時間外業務時間が削減されている。 ・計画的に業務を行っている。 ・部活動計画を立て長時間の勤務にならないよう取り組んでいる。	・必要なものが必要なときにすぐ取り出せる状態にある。 ・業務上の様々な資料について、再利用、共有できる状況にあり、次に業務に当たる職員が円滑に取り組み、業務に当たる時間が削減されている。 ・部活動は平日3時間以内、休日(週休日・休業日含む)は4時間以内、土日のどちらかは休みを実践。 ・職員、生徒共に家族や地域での活動時間、自己研鑽時間が確保できている。	・教職員「ものの定位置を決め、実践できた」職員が80%以上ならA。 ・全教職員が時間外業務月45時間以内、年間合計360時間以内ならA。	・ものを置く場所を決め、定位置に置くことを励行し、整理整頓に努める。 ・各自が資料の整理方法についてルールを決め実践する。 ・担当した業務において、気づいた改善点はすぐに反映させ、資料の修正、申し送り事項を作成する。 ・先を見通した業務計画、準備計画を作成し実施する。 ・部活動計画を立て、長時間勤務を防止する。	・各教科・各分掌に割り振られている印刷室、資料室の棚の整理整頓が維持されている。 ・使いつばなし・廃材などが散乱するなど整理整頓に欠けることがある。 ・年度末までに業務改善シートの作成を呼びかけた。 ・9月末時点で時間外業務時間が月45時間を超えた教職員は延べ12名、6ヶ月の合計時間が180時間を超えた教職員は17名となった。	C	・引き続き整理整頓を心掛ける。 ・個人の時間外業務時間を把握するために時間外業務の状況を2学期末までに提示する。 ・部活動実績を確認し、適切な部活動計画に反映させる。 ・業務シートを活用し、分掌内の業務改善・分掌間の連携を図る。

評価基準

※評価基準に複数の目標を設定している場合、全ての目標を達成してA評価とする

アンケート結果によるもの (部活動関係も準ずる)	A 80%以上 B 70%以上～80%未満 C 60%以上～70%未満 D 50%以上～60%未満 E 50%未満
-----------------------------	---